

受賞作 伊藤晋太郎氏『「関帝文献」の研究』（汲古書院、2018年）

本論文は、三国蜀の武将である関羽が、後世に「関帝」として神格化されることに伴い、元代以降、関羽／関帝の伝記や伝説、関羽／関帝に関する評論や詩詞などを収録して成立した「関帝文献」についての研究である。「関帝文献」の総体としての特徴、「関帝文献」それぞれの特色、出版目的を明らかにすることにより、「関帝文献」が、中国近世における関帝信仰の中でどのように位置づけられるのかを考察したものである。

序論では、本論文が取り上げる「関帝文献」の概観と学説史の整理、および問題関心の所在が示される。

第一章では、「関帝文献」の内容のうち、「本伝」篇と「翰墨」篇が扱われる。「本伝」篇は、関羽／関帝の伝記であり、ほとんどの「関帝文献」に見える。一方、「翰墨」篇は、関羽／関帝自身が認めたとされる手紙等の詩文を収録するものであり、その内容を全く異にするが、各文献の特質・性格が表れやすいという点で共通する。

第一節では、「関帝文献」の「本伝」篇に、関帝信仰に対して冷静な態度で編纂された史実に比較的忠実なもの〔グループⅠ〕と、関帝に対する熱烈な信仰心をもって編纂され、関帝についての言説をできるかぎり取り込んだもの〔グループⅡ〕とに二極分化していることが示された。第二節では、〔グループⅠ〕の中に、本来的には〔グループⅠ〕にそぐわない、手紙の引用と「単刀会」に関する記載が含まれる理由を検討し、これらは史部の文献から引用されており、編纂者はこれらを史実と認識していたとされる。第三節では、「翰墨」篇における偽託を検討して、文献ごとの手紙の収録状況や各「関帝文献」における「翰墨」篇の有無からも、第一節・第二節で得た両グループの方向性の違いが反映されていると確認する。

第二章では、「関帝文献」における関帝の容貌と関帝信仰の関わりについて論じられる。「関帝文献」には、関帝の絵が附され、その容貌からも関帝信仰の具体像を知ることができる。

第一節では、「関帝文献」所収の関帝の肖像に、明清時代に流行していた人相術の深い影響が見取れることが示された。第二節では、関帝の七つのほくろが、北斗七星の象徴であり、青龍偃月刀や赤兔馬などと同様に、関帝の武威を強化する意味合いがあるとされた。第三節では、関帝のトレードマークとされるひげを手がかりに、関帝伝説の流布時期を傍証する詩を指摘する。そして、詩中に見える「虬髯」という語の意味の変化を考えたとき、それは本来ひげの形状を表す語ではなく、そのひげの持ち主が超人的な偉大な人物であることを表しているとした。そして、これらからは、それが図であろうと文字であろうと、「関帝文献」における関帝の容貌の表現には、当時の人々の意識がそのまま反映されていると指摘された。

第三章では、関帝の一生が図によって描かれた「関帝聖蹟図」が検討される。清代になると、関帝は孔子と並び称され、孔子が文の聖人であるのに対して、武の聖人とされるようになるが、これは時代の推移につれて意図的に操作された結果である。中でも最も顕著な例は、「孔子聖蹟図」を模倣して「関帝聖蹟図」が制作されたことにある。

第一節では、「関帝聖蹟図」が、「孔子聖蹟図」の模倣であり、なかでも呉嘉謨『孔聖家語図』所収のものであることが特定される。そして、関帝を孔子と同等の地位に引き上げるために、その生涯の序盤と終盤のエピソードにおいて集中的に「孔子聖蹟図」の内容を模倣していることが明らかにされた。第二節では、「関帝聖蹟図」には確かに史書に由来する要素も見られるが、王朱旦「漢前將軍壯繆侯関聖帝君祖墓碑記」や『三国志演義』、民間伝説など史書以外に由来する要素を持つ図が圧倒的に多いことが解明された。第三節では、「関帝聖蹟図」における、『三国志演義』の採用・不採用が検討される。『三国志演

義』を採用した図においては、関羽の「忠」「義」「武」「勇」といった点が強調され、関羽の生涯における汚点を払拭するために『三国志演義』を採用している場合もある。一方、『三国志演義』を採用していない図があるのは、関羽のイメージの悪化や、編纂当時の関係者の立場を考慮したためと考えられる。「関帝聖蹟図」は当時の関羽像のスタンダードになっていた『三国志演義』の関羽像に多大な影響を受けつつも、そのエピソードの採用についてはあくまでも主体的に選択していることを指摘した。

以上、第一章から第三章まで論じてきたことから浮き彫りになったのは、「関帝文献」やそこに収録される諸要素には、その制作に関わった人々、またさらにその背後にいる数多の関帝を信仰する人々それぞれが抱く関帝に対するイメージ、理想とする関帝の姿、関帝に託するものなどが込められている、ということである。た

だ、各「関帝文献」を横断的に見ると、それぞれの編纂者たちの志向には、二つの異なるベクトルを見て取ることができ、先述のように「関帝文献」を〔グループⅠ〕と〔グループⅡ〕に大別することができる。

〔グループⅠ〕の編纂者たちは、あるべき関帝像を史実にできるだけ近づけることによって求めた。かれらは当時世間に溢れていた出処の不明な俗説を排し、史書に根拠を見出せる要素のみを採ろうとした。一方、〔グループⅡ〕の編纂者たちは、理想とする関帝像を補強するための資料を広く集めて採り込んでいった。「翰墨」篇を設けた上で、関帝の汚点を拭うために後人が偽作した手紙を積極的に収録したり、発表当時から非難の多かった王朱旦「漢前將軍壯繆侯関聖帝君祖墓碑記」とそれに基づく「関帝聖蹟図」を収めたりしているのも、そのために必須と考えられたからであろうとする。ただ、グループの別に関係なく、双方に共通する志向がある。それは、関帝を孔子になぞらえようとしたり、関帝の地位を孔子と同等にまで引き上げようとしたりする動き、すなわち関帝の「儒家化」である。関帝は一般に、道教の神として認識されることが多い。しかし、「関帝文献」に限って言えば、基本的に儒教の力が強いといい。そのことは、「関帝文献」に収録される肖像や「関帝聖蹟図」において、関帝を孔子になぞらえようとする動きがあることから見て取れる。とくに〔グループⅠ〕に属する文献は、「本伝」篇の史実化といい、関帝の手紙の収録のしかたといい、儒教を奉じる士大夫の価値観が強く出ている。関帝信仰において、「関帝文献」は孔子と同等の地位にある儒神としての関帝を宣揚するためのツールと位置づけることができる、とするのである。

本研究は、「関帝文献」に関する日本で唯一の本格的な研究であり、先行研究の調査も行き届き、論考の方法の設定、その進め方、結論も妥当で、当該分野の研究水準を超えている。以上の内容を持つ伊藤晋太郎氏『「関帝文献」の研究』は、第二回 狩野直禎先生記念 三国志学会賞の授与に値するものである。